

幼小連携のための保育・教育実践における木育教材の開発Ⅲ —オンデマンドを用いた教材の研究—

矢野 真
(児童学科教授)

田爪 宏二
(京都教育大学教育学科准教授)

吉津 晶子
(熊本学園大学子ども家庭福祉学科教授)

本研究は、幼小連携のための「木育」教材に着目し、「木育」によるワークショップの実践を計画・検討する上で、「対面」と「オンデマンド」を用いた造形教材研究について、参加した学生の意見・自由記述を実践1・2に分けて分析・検討を行った。その結果、オンデマンド教材の作成における主な学びとして、対象者の理解や興味を促す動画の作成、またそのような保育実践のあり方において「分かりやすい説明・見せ方」についての学び、そして実際の子どもの活動や反応を予想しながら動画を作成する「子どもの姿を予想すること」の気付きがみられた。この視点は、対面での保育においても重要であると考えられ、オンデマンド教材の制作を通して保育における子どもの姿を予想することの重要性についての学びが明らかとなった。

キーワード：木育、オンデマンド教材、幼小連携、木育教材、ワークショップ

1. はじめに

本研究は、幼小連携のための保育・教育実践を考慮した、保育者養成校と保育現場、小学校、そして地域との交流を通して、子どもの感性を高め、身近な素材に関わりながらコミュニケーション能力を育むための「木育」¹⁾教材の開発を提案するものである。

矢野・田爪(2020)は、「幼小連携のための保育・教育実践における木育教材の開発Ⅰ」において、造形ワークショップ(ワクワク木育キャラバン)による活動を中心に、2年間携わってきた学生の報告書についての分析から、「木育」による造形ワークショップの実践における有効性について検討してきた。その結果、「素材(木)との関わり」「五感を使った関わり」「コミュニケーション」「意欲、動機づけ、主体的な活動」など、子どもが五感を使って素材(木)と関わる様子や、五感を通して木に興味を持つようになっていくことへの気づきなど、「木育」教材の有効性を導き出すことができた。

また、矢野・田爪(2020)「同Ⅱ」では、幼

児期に育みたい資質・能力の「3つの柱」に挙げられる基本的な技能の育成や、「身近なものに関わり感性が育つ」ことをより具体的に提示していくための保育者への「木育」によるワークショップの実践を行った。これに参加した保育者及びその周囲の保育者を中心に実施したアンケート調査を分析した結果、木育による造形活動の幼小連携における可能性について、幼小の経験の連続性や「木育」経験による感性を育むなどの教育効果につながる事が明らかとなった。さらに学力に結びつく認知的能力だけでなく、その下支えとなる非認知的能力の育ちにも影響があると受け止められていることも明らかとなった。

このように「木育」教材の幼小連携における可能性を高めるために必要と考えられる、新たな「木育」によるワークショップの実践を検討し計画を進めてきた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い対面による造形ワークショップの見直しを余儀なくされたため、急遽オンラインを用いた「木育」教材を検討・計画

することとした。

須藤ら（2020）は、大学生の動画教材を活用したオンライン教育について、「高い学習への動機づけを生み出す学習環境全体のデザイン、もしくは低い学習への動機づけでも学習を生み出す学習環境全体のデザインの必要性が指摘できる」と結論付けている。オンラインで教材を計画・検討するためには、対面による造形ワークショップと同等な学生自身の高い動機づけが必要となる。

また、対面を重視する造形ワークショップと比較して、オンラインで教材を計画・検討することは、実施する上でかなりの制限が予想されることは明白である。これまで対面で行ってきた「木育」教材と比較した場合のメリット・デメリットに関する違いがあることが予想される。

2. 目的と方法

そこで本研究では、「木育」による「オンデマンド配信を用いた造形教材研究」を実施する上で、対面活動との比較・分析を行うことを目的とした。

研究の方法は、「木育」によるワークショップ実践の計画・検討に参加した学生の意見・感想を比較し、さらに自由記述についての分析を行うこととした。

なお、調査協力者に対し、研究の目的及びプライバシーの保護等の倫理的配慮を伝え、データの使用等について同意を得ている。

3. 対象者

3-1. 実践1における対象者

参加対象者は、保育者養成を主とする女子大学の4回生（2020年度）14名であった。

この14名は1回生で“木育”についての概要について講義形式で学び、2回生では「児童図工Ⅰ」におけるペンダント制作（写真1）、及び「保育内容演習（造形表現）」における手触りや香りを感じる演習を行い、木育のまとめとして3回生では、グループによる木の玩具制作（写真2・3）も行っている。

また、2019年度において、通常の対面によ



写真1 制作したペンダント作品



写真2 グループ制作による木の玩具作品①



写真3 グループ制作による木の玩具作品②

る「木育」によるワークショップ（ワクワク木育キャラバン）を経験しており、学生全員で「木育」による造形教材の検討と実践を理解し、協働学習としてワクワク木育キャラバンとワクワク造形キャラバンあわせて12回程度の造形ワークショップ（写真4）を行っている。

3-2. 実践2における対象者

参加対象者は、保育者養成を主とする女子大学の4回生（2021年度）10名であった。

対象の学生は、1回生で“木育”についての概要について講義形式で学び、2回生では「児童図工Ⅰ」におけるペンダント制作、及び「保育内容演習（造形表現）」における手触りや香りを感じる演習を行い、3回生ではグループによる木の玩具デザインの検討・提案も行っている。これら学びにおいて、日本の森林面積や寺社・仏閣、そして日本書記などにみられる木についてなどの理解も深め、「日本は木の文化である」ということを理解し、日本や世界には様々な木があることを、実際の板材などを手に取りながら、「木育」についての理解を深めている。

4. オンデマンド配信による実践

4-1. 実践1

これまでの対面による造形ワークショップ（ワクワク木育キャラバンとワクワク造形キャラバン）実践についての流れは、

- ①題材の検討・決定
- ②木地の加工・準備
- ③園やイベント会場等での実践
- ④実践の振り返りと実践報告書の作成
- ⑤次回の題材の検討・準備

といった手順で行われていた。

今回はオンデマンド配信での検討ということから、上記した①②について、zoom及び対面により検討を重ね、幼児に理解できるように工夫するだけでなく、保育者、そして小学校の教員にも活用できるよう配慮した。

そこで、動画時間を3～5分以内とし、わかりやすく解説を入れるとともに（写真5・6）、動画専用で作成した曲（森を歩けば）を使用す



写真4 ワクワク木育キャラバン実施風景



写真5 オンデマンド配信による造形教材



写真6 動画が理解できるようにわかりやすく解説を入れる

ることとした。

4-2. 実践2

ここでは、実践1における上回生の実践内容を再検討し、動画としての背景のクオリティや準備するものなどの視覚的効果、幼児がさらに楽しくできる教材の検討、そして保育者・教員に対する教材のねらいや目的などを明確にするなどの工夫（写真7・8・9）を行いながら活

動を行った。



写真7 動画撮影として背景などを工夫する

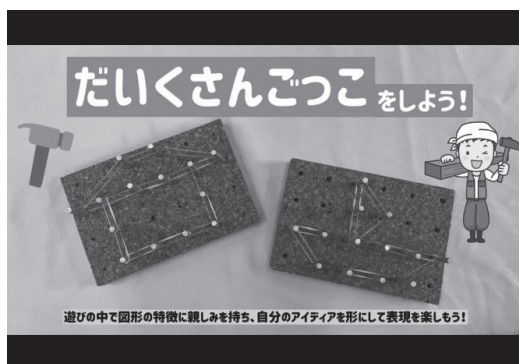


写真8 ねらいを入れた動画オープニング

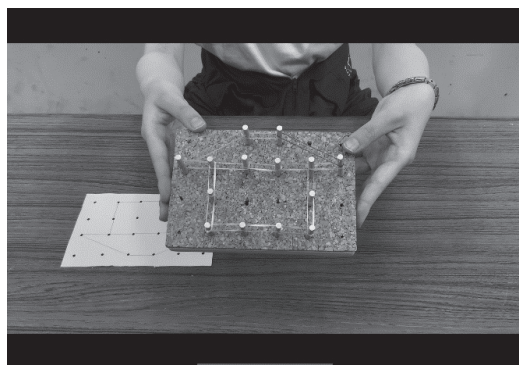


写真9 オンラインによる制作過程



写真10 実際の木を観察する活動場面

これまでの実践1における対象者とは違い、実践2における対象者は協働学習としての対面による造形ワークショップの実践が厳しい状況であった。そこで、制作に関する内容は個別指導を中心に行い、zoomを用いて全員でディスカッションを行い、造形ワークショップ等を検討してきた。

対面による造形ワークショップの継続的な参加は、学生一人ひとりの自信、制作支援や関わりの充実、さらには支援技術の向上や造形ワークショップの社会的な意義についての深まりへと変化することに繋がることから、以前の研究からも確認できている²⁾。その反面、「つくる」ことに特化していたことにより、「つくる」教材の提示の仕方を優先した検討が多かったことも確認できた。

今回の動画を検討することによって、今までの「つくる」ことに特化した教材提示に加え、「つくる」までの導入（環境問題や地域との関わり方）を子どもに伝えることを同時に意識することの重要性が提案された。

そこで、新型コロナウイルス流行拡大という状況下での可能な限り、対面活動として学生自身が実際に生きている木に触れ、葉の香りや風に揺らぐ音などを全員で体験することを通して（写真10）、子どもに木育を通じて何を育むことができるかということを考え、改めて動画作成に必要なコンテンツの再検討を行った。

絵本『きみのこどもに会う日には』（あらすじ）

森の近くに住んでいる男の子が、森へお気に入りの木に会いに行く。ある日嵐が来て、お気に入りの木が倒れてしまう。子どもは悲しむが、父親は木が倒れた後に森がどうなるのかを子どもに伝え、父親が木の枝から、ペンダントを作ることを提案する。ペンダント作りを通して木の手触りや香りを五感で感じ、子どもが一本の木を通して、木や森に興味を持ち、自然への理解が深まる、というストーリーである。



写真 11 『きみのこどもに会う日には』表紙

その再検討において、学生自身が自然の木に触れることを通して学んだことを活かした、木育に関する絵本の読み聞かせの導入などを検討し、絵本を動画にする提案をもとに、卒業生の協力のもと、『きみのこどもに会う日には』を使った動画を作成・公開³⁾した。

5. 質問紙調査の結果及び考察

5-1. 実践 1

質問紙調査

本研究において実践したオンデマンド配信を

表 1 (実践 1)「対面活動による造形教材研究」と「オンデマンドを用いた造形教材研究」との感想の比較(N=14)

(数値は人数, 括弧内は%)

質問		5.はい	4.どちらか といえは	3.どちらとも いえない	2.どちらか といえは いえ	1.いえ
			い			
A.かなりの回数で参加していますか	対面	13 (93)	1 (7)			
	オンデマンド		14 (100)			
B.今後の保育現場で役に立つと思いますか	対面	12 (86)	2 (14)			
	オンデマンド	9 (64)	4 (29)	1 (7)		
C.難しさを感じますか	対面	6 (43)	5 (36)	2 (14)	1 (7)	
	オンデマンド	11 (79)	3 (21)			
D.子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか	対面	12 (86)	2 (14)			
	オンデマンド	3 (21)	7 (50)	3 (21)	1 (7)	
E.子どもとのコミュニケーションを取ることによって役立つと感じましたか	対面	13 (93)	1 (7)			
	オンデマンド	2 (14)	1 (7)	7 (50)	3 (21)	1 (7)
F.保育者の技能向上や創造性の発展につながると感じましたか	対面	10 (71)	4 (29)			
	オンデマンド	8 (57)	5 (36)		1 (7)	
G.コミュニケーション・スキルの向上に役立つと思いますか	対面	12 (86)	2 (14)			
	オンデマンド	3 (21)	2 (14)	7 (50)	1 (7)	1 (7)
H.もっと知りたい、参加したいと思いましたか	対面	9 (64)	5 (36)			
	オンデマンド	4 (29)	5 (36)	3 (21)	1 (7)	1 (7)
I.保育現場に取り入れてみたいと思いますか	対面	12 (86)	2 (14)			
	オンデマンド	4 (29)	8 (57)	1 (7)	1 (7)	

用いた造形教材研究について、これまでに行ってきた対面活動による造形教材研究との比較を行うため、受講者を対象に尺度評定及び自由記述からなる質問紙調査を実施した。

結果

5-1-1. 数量的分析：「対面活動による造形教材研究」と「オンデマンド配信を用いた造形教材研究」の比較

表1に示す質問項目について、5件法（5：はい～1：いいえ）で回答を求めた。その結果、多くの項目において、対面活動による造形教材研究の評価が高く、特にコミュニケーションに関する項目（E, G）についてはその差異が顕著であった。

5-1-2. 記述の分析

質問紙調査における自由記述の内容を文単位に区切り、カテゴリー化を行った。記述の傾向から、表2に示すカテゴリーに分けられた。記述内容を分析した結果、①オンデマンドのメリットとしては、多くの人がどこからでも参加できること、視聴側が何度も繰り返しみることや、収録の撮りなおしが可能であること、カメラならではの見せ方の工夫ができることなどが挙げられた。他方で②オンデマンドのデメリットとしては、対面と異なり反応が分かりにくく

表2 「オンデマンドを用いた造形教材研究」の感想のカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
①オンデマンドのメリット	繰り返し視聴できる／収録のメリット（撮り直しができる）／どこからでも参加できる／ワークショップの質の向上／見せ方の工夫ができる／多くの人に対応できる
②オンデマンドのデメリット	コミュニケーションがとりにくい／反応がわかりにくい／素材の選定（素材が限られる）／動画づくり（角度が難しい）
③配慮すべきこと	ネット環境／オンデマンド配信方法の配慮／コミュニケーションへの配慮／教材研究／説明の工夫／素材の工夫／動画づくりの工夫
④IT機器のスキル	オンデマンド配信の技術／カメラの使い方／見本の拡大／撮り直し／撮る角度／声の出し方／動画の編集

コミュニケーションが取りにくいこと、家庭（視聴側）の素材が限定されること、動画づくりの難しさなどが挙げられた。またこれらに関連して、③オンデマンドにおいて配慮すべきこととして、コミュニケーションへの配慮や説明方法の工夫、また素材の工夫などの教材研究の必要性も挙げられた。また、オンデマンド配信における④IT機器のスキルとして、カメラの使い方や撮る角度、声の出し方や編集方法などが挙げられ、それらについて難しさを感じているとする意見も見られた。

（学生の自由記述部分をそのまま抜粋）

①オンデマンドのメリット

○繰り返し視聴できる

・動画として残すことで、紙媒体では分かりづらい細やかな作業も繰り返し確認できるため視聴者に優しいと感じた。

○収録のメリット（撮り直しができる）

・オンデマンドを利用することで、取り直しをしたり客観的に見直したりすることができるため、言い方や見せ方等の伝える方法を工夫しながら落ち着いて動画作成ができてよかった。

○どこからでも参加できる

・毎年ワークショップを行えないところでも動画を見て造形活動の認知が広がると考える。

○ワークショップの質の向上

・インターネット環境など様々な問題点はあると思うが、併用して用いることでワークショップの質が上がり、保育の幅の拡大につながる重要な要素であると考ええる。

○見せ方の工夫ができる

・オンデマンドでの造形活動をする上での良かった点は、全員の子どもが、お手本を作る保育者の様子を同じ角度から見る事が出来て、手元が見本の拡大も簡単に見せることができる点だと感じた。

- ・複数人で担当を分けることで伝わりやすい見せ方を考えることができた。

○多くの人に対応できる

- ・今年度行ったオンデマンドを活用したワークショップを通して、多くの人と携わることができると感じたのでよかった。

②オンデマンドのデメリット

○コミュニケーションがとりにくい

- ・難しかったのは、相手がどこで、難しいと感じるのか、がわからないため、セリフの中で、どういったアドバイスやポイントを含めて説明するのが良いのかが、難しかった。

○反応がわかりにくい

- ・オンデマンドを活用した造形教材研究は、対面と違いコミュニケーションをとりながら様子を見て進めていけるものではないため、その説明でどの程度理解してもらえるのか、また、わかりやすく伝えるにはどうすればよいか考えながら行うことが難しかった。

○素材の選定（素材に限られる）

- ・難しかった点は、対面活動と違い、教材を用意しても各自で揃えなければならない為、手に入れやすい素材で代用品を考えなければならなかったこと、顔が見えない為、説明がどの程度伝わるかわからず、説明の言葉やスピードをより考えなければならなかったこと。

○動画づくり（角度が難しい）

- ・オンデマンドだと決められた角度でしか見ることができないため、全体がしっかり映っているかなど確認しながら進めなければならなかった。

③配慮すべきこと

○ネット環境

- ・オンデマンドだとネット環境の問題やこちらが慣れていない動画の編集等、活動とは関係のない所でのハブニングや時間を取らなければならないということが起きてくる。

○オンデマンド配信方法の配慮

- ・動画で残すという利点を活かすために、現在の状況が緩和されれば対面でワークショップを開催し、振り返りとして紙の説明書ではなくウェブサイトや二次元バーコードを使って動画を提供することで従来よりフィードバックが充実したものになると考える。

○コミュニケーションへの配慮

- ・ビデオ通話等で、子どもの表情や活動の進捗、様子を見ながらやりとりができればより良いと考える。

○教材研究

- ・今回の経験を活かして保育者がいない間も保護者と楽しめるような教材研究をしていきたい。
- ・子どもがみて、作りたいと思えるような、またみてわかるような動画にしたい。

○説明の工夫

- ・手順を伝えることを念頭に置きすぎて、対面で行うワークショップに比べて淡々と進めてしまっているように感じたため、子どもたちがそこにいると想定して活動を行うべき。

○素材の工夫

- ・材料の代用になるものを吟味したり、親子での関わり合いが生まれるように流れを考えたりと、今まで行ってきたワークショップの準備とはまた違った大変さがあった。

○動画づくりの工夫

- ・オンデマンドでは対面活動とは違った難しさがあるが、回数を重ね反省点を挙げていくことで、撮る角度など改善できる部分はたくさんあるのではないかと。

④IT機器のスキル

○オンデマンド配信の技術

- ・動画で残すという利点を活かすために、現在の状況が緩和されれば対面でワークショップを開催し、振り返りとして紙の説明書ではなくウェブサイトや二次元バーコードを使って動画を提供すること

- で従来よりフィードバックが充実したも
のになると考える。
- カメラの使い方
 - ・改善点としては、難しかった点であげたカメラの使い方を改善していきたい。
 - 見本の拡大
 - ・オンデマンドでの造形活動をする上での良かった点は、全員の子どもが、お手本を作る保育者の様子を同じ角度から見る事が出来て、手元が見本の拡大も簡単に見せることができる点だと感じた。
 - 撮り直し
 - ・また、撮り直しができるため、撮る方も作業の手順など一つ一つ確認しながら進めることができてやりやすいと感じた。
 - 撮る角度
 - ・難しかった点は、撮る角度などどうやれば見ってもらう人に伝わりやすいかを考えることである。
 - 声の出し方

- ・オンデマンドを活用した造形教材研究を実施してみて、動画を撮影しに声の出し方を注意していくべきである。

○動画の編集

- ・初めてオンデマンドで行って見て、動画を撮る向きや距離、話し方、タイミング、スピード等、どのようにすると伝わりやすいか試行錯誤した。

5-2. 実践2

質問紙調査

オンデマンド教材の作成を通じた学生の学びの姿について検討するため、授業終了後に受講学生を対象にアンケートを実施した。なお、オンデマンド教材により着目するため、数量的分析においては実践1から一部質問項目を変更した。また、記述の分析についても、質問を明確化し、「オンデマンドを活用した木育による造

表3 (実践2) 「オンデマンド教材の作成」 についての感想 (N=10)

(数値は人数、括弧内は%)

質問	5.はい	4.どちらかといえばはい	3.どちらともいえない	2.どちらかといえばいい	1.いいえ
a.対面による「木育」による活動よりも、難しさを感じましたか	3 (30)	4 (40)	3 (30)		
b. オンデマンドを活用した「木育」を活用した作品づくりは、今後の保育現場で役に立つと思いますか	6 (60)	4 (40)			
c. オンデマンドを活用した「木育」を活用した造形活動に保育者側からの難しさを感じますか	2 (20)	4 (40)	3 (30)	1 (10)	
d. オンデマンドを活用した「木育」は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか	1 (10)	5 (50)	4 (40)		
e. オンデマンドを活用した「木育」は、子どもとのコミュニケーションを取ることに役立つと感じましたか		3 (30)	4 (40)	1 (10)	2 (20)
f. オンデマンドを活用した「木育」は、保育者の技能向上や創造性の発展につながると感じましたか	2 (20)	5 (50)	3 (30)		
g. 今回のオンデマンドを活用した「木育」の活動について、達成感がありますか		6 (60)	4 (40)		
h. 今回のオンデマンドを活用した「木育」は、「幼小連携」で役に立つと思いますか	2 (20)	6 (60)	2 (20)		
i. 今後、オンデマンドを活用した「木育」を保育現場に取り入れてみたいと思いますか	2 (20)	5 (60)	2 (20)	1 (10)	

形活動による学びと可能性の気づき」及び「オンデマンドを活用した木育による造形活動の難しさや限界」の2点について自由記述を求めた。

結果

5-2-1. 数量的分析

表3に示す質問項目について、5件法（5：はい～1：いいえ）で回答を求めた。その結果、多くの項目において、半数以上の受講生が「はい／どちらかといえば、はい」と回答している。項目c「オンデマンドを活用した「木育」を活用した造形活動に保育者側からの難しさを感じますか」についても同様であることから、受講生は木育を題材としたオンデマンド教材の作成それを活用した保育について一定の効果を認めつつ、難しさも感じていることが窺われる。但し、項目e「オンデマンドを活用した「木育」は、子どもとのコミュニケーションを取ることに役立つと感じましたか」については、他の項目に比べて「どちらとも言えない／どちらかといえば、いいえ／いいえ」の回答数が多く、オンデマンド教材がコミュニケーションという側面については効果が低く捉えられていることが窺われる。

5-2-2. 記述の分析（1）オンデマンドを活用した木育による造形活動による学びと可能性の気づき

受講生に対して「オンデマンドを活用した木育」による造形活動について、対面では気づかなかったことや今回学んだこと、また保育現場でどのような可能性があると思いますか」と質問し、自由記述を求めた。

記述について、「オンデマンド教材の作成における学び」と「保育現場における可能性」に分類し、さらにそれぞれについて記述の特徴をカテゴリー化した。以下では、この分類に沿って学生の代表的な記述を示しながら考察を行う。

5-2-3. オンデマンド教材の作成における学び オンデマンド教材の作成における主な学びと

して、「分かりやすい説明・見せ方」及び「子どもの姿を予想すること」が挙げられた。「分かりやすい説明・見せ方」については、オンデマンドでは対面のようにその場での説明ができないため、理解や興味を促す動画の作成、またそのような保育実践のあり方についての学びがあったとの意見が見られた。オンデマンド教材に共通する意見とともに、触感への気づきや木の素材など、木育に固有の内容に配慮する必要性への言及も見られている。

「子どもの姿を予想すること」については、実際に子どもが目の前に居ることを想像し、子どもの活動や反応を予想しながら動画を作成することの重要性についての気づきが述べられている。この視点は、対面での保育においても重要であると考えられ、オンデマンド教材の作成を通して保育における子どもの姿を予想することの重要性についての学びがあったことが窺われる。

○分かりやすい説明・見せ方

- ・どのようにすれば「木育」について関心を持って貰えるか、どのような動画を作れば子どもたちがわかりやすいかなど、子どもたちに理解してもらうための工夫をより深く考えた。
- ・子どもたちに理解してもらうための導入や、過程の重要性に改めて気付くことが出来た。
- ・対面で子どもに造形活動の説明ができないため、子どもにどう説明するのが一番伝わりやすいのかななどを、細かく、具体的に考えるようになった。
- ・触感に気付くきっかけとして、手触りを確かめている様子を見せ、触れるように言葉を掛けた。
- ・オンデマンドでは、全ての材料がすでに手元にあり、どの材料を使うのかが分かりにくい場合が考えられるため、葉っぱの絵を描いておいて、「葉っぱが描いて

ある木」などと表現できるように、工夫しておく必要がある。

○子どもの姿を予想すること

- ・活動中の子どもの姿を予想し、ねらいに沿った働きかけを行うことが必要且つ重要である。
- ・受け手はその活動に取り組む時の環境は、受け手によって異なり、いくら想像しても足りないほどである。
- ・画面の向こう側の受け手を想像して制作する過程で、「予想される子どもの姿」をしっかり考える重要性。
- ・カメラの前に立つときは、子どもたちの反応をイメージして動画作成に取り組んだ。

5-2-4. 保育現場における可能性

オンデマンド教材の保育現場における可能性は、保育（保育者）側の可能性と、幼児（家庭）における可能性に区分することができた。

保育（保育者）側の可能性は、「保育に対する新たな学び」、「遠隔による保育」、「教材作成」に区分された。「保育に対する新たな学び」については、保育者が他者の作成した動画を見たり、保育者間で動画を共有したりすることで保育についての学びが得られることが挙げられた。「遠隔による保育」については、オンデマンドを活用することで遠隔地にも教材を提供できることや、保育現場にない素材を紹介することが出来ることなどが挙げられた。「教材作成」については、動画作成は撮直しや細部の工夫や、画像等の素材の活用が可能であることが挙げられた。

幼児（家庭）における可能性については、「時間や場所の制限がないこと」、「木育を知ってもらう機会」に区分された。「時間や場所の制限がないこと」については、家庭においていつでも視聴が出来ることなど、保育へのアクセスの便宜の良さが挙げられた。「木育を知ってもらう機会」については、前述したアクセスの良さから、より多くの幼児、家庭に木育を知っても

らう機会となることが挙げられた。

○保育に対する新たな学び

- ・保育者は他の団体に所属する者の動画を見て、新たな視点を学ぶことができる。
- ・木育での造形活動でのねらいに沿った働き掛けを知る可能性。
- ・動画や企画書をもとに、保育者が新たに活動を考えて実践することで、より発展した活動に繋がる。

○遠隔による保育

- ・オンデマンドを活用することで日本中のどこからでも、造形活動への参加が可能になる。
- ・移動せずに日本中どこの園でも造形活動を行うことができる。
- ・その場に行かずとも子どもたちが動画を見ることで「木育」の活動の導入となり得ると思う。

○教材作成

- ・何度も試行錯誤して細部までイメージ通りのものを提供できる。
- ・手に入らない珍しい木や葉を見たい時は、インターネット内の写真や動画を活用すれば良い。

○教材作成

- ・何度も試行錯誤して細部までイメージ通りオンデマンドを活用することで日本中のどこからでも、造形活動への参加が可能になる。

○時間や場所の制限がないこと

- ・好きな時間に何度でも視聴することができる。
- ・家庭でも気軽に制作に取り組みられ、木育の動画を通じて子どもが身の回りの自然に興味をもつことで、保育の内容もさらに深まると考えられる。

○木育を知ってもらう機会

- ・より多くの人が動画を見て木育を知ることができる。
- ・インターネットを利用し配信しているた

め、対面よりも多くの子どもたちに木育に触れてもらうことができる。

分析

5-3. 記述の分析（2）オンデマンドを活用した木育による造形活動の難しさや限界

受講生に対して「オンデマンドを活用した木育による造形活動について、難しいところ、オンデマンドの限界」について、自由記述を求めた。

記述について、記述の特徴をもとに相互作用の難しさを示す「一方方向の配信」、「反応がわからない」、「伝わりにくさ」、また「五感を使用できない」、「メディアの課題」に分類した。

記述について、記述の特徴をもとに相互作用の難しさを示す「一方方向の配信」、「反応がわからない」については一方方向の情報配信のために子どもの様子や反応がわからないことやフィードバックが得られないことの不安、「伝わりにくさ」については子どもの反応を見ながら実践が出来ないため、情報を伝えることが挙げられた。これらはいずれも保育における保育者と子どもの相互作用やコミュニケーションに関わる課題であり、それらはオンデマンド教材において困難を感じやすい内容であると考えられる。

「五感を使用できない」については、木育の特徴である触感や匂いが動画は伝えることが挙げられた。「メディアの課題」については、家庭のインターネット環境や、長時間の視聴による健康面の不安が挙げられた。

○一方方向の配信

- ・動画を配信するという一方通行の活動になってしまう。
- ・受け手側の状況や環境に合わせたものを提供できないため、各園の状況に合わせて保育者が応用することで、活動の軸が

ぶれたり、学生が意図していたことと違う方向性になってしまったりする。

○反応がわからない

- ・動画の内容だけでなく「木育」について子どもたちにきちんと伝えられているかという点が不安である。
- ・実際の活動内容や保育者の言葉がけ、子どもの様子や感想を学生が見て感ずることが出来ない。
- ・フィードバックをしっかりと行わないと次の活動に生かし辛い。

○伝わりにくさ

- ・場面の切り替えをしすぎると視聴しにくい、あまりしていないが、そのために様々な表現（表情）を伝えることができない。
- ・実際に造形活動を行う子どもたちの傍にいないため、わからないところを繰り返し実践することや、教えることが出来ない。

○五感を使用できない

- ・木の香りや触り心地など、五感を感じられる活動が同時に体験できない。
- ・子どもたちが木の香りや触感を確かめながら木と触れ合う様子を見ることが出来ず、それに気付きを与える言葉掛けなども出来ない。

○メディアの課題

- ・現場での理解度やインターネット環境がきちんと整えられているか。
- ・長時間画面を見続けることの身体面、心理面への影響。

6. おわりに

本研究の結果を総合すると、学生はオンデマンド配信による保育教材の作成を通して、オンデマンド教材に固有の内容に加えて、対面による保育にも共通しうる、保育についての新たな学びがあったことが窺われた。

他方で、五感を通して感じるなど、特に木育

に特有な内容についてオンデマンド教材の限界を感じていることも窺われた。

今回の実践は新型コロナウイルス流行拡大という状況下でのオンデマンド配信による保育教材の作成であったが、この状況の収束後も今後は保育現場においても ICT 機器の活用が急速に広がることが予想され、本研究で実践した教材作成はこれからの保育現場に対応しうる保育者の養成という点からもより詳細な検討を加えていく必要があるだろう。

本研究の今後の展望としては、本研究において学生から挙げられた課題を踏まえて教材作成及び保育実践を改善し、その効果について検討することが挙げられる。

註

- 1) 「木育」とは、平成 16 年に北海道庁が発信した地域プロジェクトであり、木とのかかわりを通して、自然の一部として多くの生命と共存しながら生きていくことを実感し未来へつなげる取り組み。
- 2) 矢野真・田爪宏二 (2020). 地域連携を通じた木育教材の開発—木育ワークショップに参加した学生の学びから—, 京都女子大学発達教育学部紀要, 16, 133-140

- 3) 絵本の読み聞かせ「きみのこどもに会う日には」<https://youtu.be/x2Al5UkdKG0> 閲覧日：2021 年 11 月 1 日)

引用文献

- ・矢野真・田爪宏二 (2021). 幼小連携のための保育・教育実践における木育教材の開発Ⅰ—「木育」による造形ワークショップの有効性—, 大学造形美術教育研究, 19, 80 - 83.
- ・矢野真・田爪宏二 (2021). 幼小連携のための保育・教育実践における木育教材の開発Ⅱ—保育者を中心としたアンケート調査の結果から—, 京都女子大学発達教育学部紀要, 17, 171-181.
- ・須藤智・滑田明暢・宇賀田栄次 (2020). 動画教材を活用した授業の需要度に影響を与える要因の検討：大学生の動画教材を活用したオンライン教育の需要度調査報告. 静岡大学教育研究, 16, 129-138

付記

本研究は、令和 3 年度科学研究費 基盤 (C) 研究課題 (課題番号：19K02821) 「幼小連携のための保育・教育実践における木育教材の開発」(研究代表者：矢野真, 分担者：田爪宏二, 吉津晶子) の補助を受けて行われたものである。